

大和合金、上期販売1割減

航空機・半導体向け苦戦

特殊銅合金メーカーの大和合金(本社・東京都板橋区、萩野源次郎社長)の2025年度上半期(4-9月)販売量は前期比1割減にとどまった。航空機向け材料のメンテナンス需要が一時的に伸び悩んだほか、半導体向けも競争環境の激化で想定ほど伸びていない

ことが響いた。下半期は生産効率の引き上げ、新規需要掘り起こしによる営業強化で挽回を図る考え。通期では過去最高の売上高だった前期並みの着地を目指す。

需要分野別では航空機向け需要が、アジア地域のオーバーホール業務の集積地であるシンガポール向けがユーザの調達方針の変更を受けて鈍化。欧州や北米向けも同様の理由で冷え込んだ。国内向けは安定的だったが、全体を押し上げるほどの勢いは見られなかった。ただ、萩野社長は「一過性の要因で、新たな調達方針に対応できれば海外需要の回復

を見込める」と説明する。半導体向けは競争激化や市場環境の変化により想定を下回り、今後は営業強化などで販売回復を目指す方針。さらに、溶接機向けの需要が国内外で停滞し、肉盛り溶接などに使われる溶接棒向けも

冷え込んだ。

一方、発電機用タービンをはじめとする重工業向けは堅調。エンジンの熱交換器など造船部品向けの需要も国内を中心に伸び、「足元でも前年と比べて1-2割伸びている(同)。